

歴史は未来の羅針盤

# 温故知新

これまでに刊行しました『近江日野の歴史』は、第一巻「自然・古代編」、第二巻「中世編」、第三巻「近世編」、第五巻「文化財編」、第六巻「民俗編」、第七巻「日野商人編」、第八巻「史料編」となりました。教育委員会や各公民館などにおいて、一冊四、〇〇〇円で好評販売中ですので、ぜひともお買い求めください。

『近江日野の歴史』第三巻「近世編」を発売して以来、江戸時代の様々な日野の姿を紹介しています。日野には、大字の氏神社やその末社、小祠など、様々な祭祀のかたちがあります。今回はこうした神社祭祀や祭祀の江戸時代の実態について紹介します。

## 神社と氏子

日野のみならず、蒲生郡を代表する神社として、馬見岡綿向神社があります。馬見岡綿向神社は、かつては蒲生上郡一・二八郷という広大な氏子圏を持つ「蒲生上郡の惣社」とされてきました。ところが、天正十一（一五八三）年に中絶された祭祀を慶長十三（一六〇八）年に至って再興する時に、氏子圏は祭祀に深く関わる村々を中心とした、現在とほぼ同じ範囲に再編されたと考えられています。

馬見岡綿向神社の氏子には、仁正寺藩主市橋家やその家臣、日野



▲享和3年竣工の馬見岡綿向神社拝殿

商人が数多く存在し、彼らが中心となつて様々な修造や奉納が行われました。その中でも、享和三（一八〇三）年に竣工した拝殿の修復は、純粋な町人たちの発起によるもので、実現までに長い年月と膨大な経費が費やされた一大プロジェクトでした。中心となつたのは中井源左衛門家の良祐・光昌父子で、計画自体は安永年間（一七七二〜八一）から始まりましたが、実現を見ないまま約二〇年の歳月が流れました。業を煮やした良祐は、巨額の私財を投じて、ことで計画の実現化に動き出し、

寛政十三（一八〇一）年に着工、二年後によく竣工に至つたのです。

中世には独自の社領を持ち収入を得ていた神社も多くありましたが、近世に入ると大半の社領が幕府に没収され経済基盤を失います。江戸時代の神社は、こうした氏子たちによって経済的にも支えられるようになりました。

## 様々な祭祀

祭祀には、日野祭のように毎年定期的に行われるものと、有事の際に臨時で行われるものがあります。臨時の祭祀には、雨乞いがあります。雨乞いは、農村にとって特に重要な「水の確保」という共通の願いのもとに、人々が結束して行われる祭祀です。桜谷の雨乞いでは、佐久良川を主要用水とする村々を流域ごとに三つのましまりに分け、厳格な手順に従って水源の龍王山の竜神を村の神社へ下ろし、祈願を行いました。一度

の祈願で降雨が得られなければ更に竜神を別の神社に遷し、降雨が得られるまで何度でも行われました。

政治権力を意識した祭祀もありました。徳川家康から下された朱印状や判物を神格化して祀る「御朱印祭」や「東照宮様御祭礼」です。江戸時代、村々には様々な税や役割が課せられ、負担となっていました。それらの免除を可能にするものとして、江戸幕府創始者の家康が「諸役免除」を保障した書類は村々にとつて有用なものでした。この祭祀の動機は現実的な利益に対する感謝であり、非常に実利的な祭祀であったと言えます。日野では、日野三町と仁正寺村がこの祭祀を行っていました。朱印状や判物が出された実際の意図を拡大解釈している部分もあったようですが、家康を祀ることで家康の与えた恩に報いているという名目が諸役免除を後押しすることにもつながつたのです。

江戸時代の祭祀は、こうした人々の生業や意図を反映しつつ行われていたのです。

氏名等読みが定かでないものはふりがなを書いていません